

岐阜城千畳敷遺跡・岐阜城跡

岐阜城千畳敷遺跡は現在の岐阜公園にあります。昭和 59 年度から断続的に行っている発掘調査の成果によって、古くは古墳時代から利用されていることが分かりました。室町時代には寺院が建立されていたことはほぼ間違いなく、「大寺」と墨書（ぼくしょ）された皿や梵鐘（ぼんしょう）を作った跡が見つかっています。

16 世紀の半ば頃からは城館として利用されていました。当時の城主は斎藤氏で、岐阜公園のほぼ全域にわたる一帯に居館を建設していたことがほぼ明らかとなってきました。現在公園内に見られる段々の地形は、この頃にほぼ完成していたと見られます。永禄 10 年（1567）尾張の織田信長が岐阜城（当時は稲葉山城）を攻略します。この時、火災が発生しており、焼けた陶磁器や米・麦などの炭化物などが多く出土しています。陶磁器には中国製の天目茶碗や花瓶などがあり、斎藤氏は当時としては非常に高価なものを使用していたことが分かりました。平成 8 年度の発掘では刀も出土しています。

信長は斎藤氏が造った居館を改修し、新たに御殿を建設しました。先進的な発想で、入口の防御施設・石垣を構築し、のちの近世城郭の礎を岐阜城で形にしたといえます。御殿の様子は、ポルトガルの宣教使ルイス・フロイスによって書き記されています。平成 19 年度の調査では、庭と考えられるものや、建物の柱の跡など居館の一部が見つかっています。慶長 5 年（1600）関ヶ原合戦の前哨戦で岐阜城は落城します。直後の加納城築城のため、建物や石垣が運び出されたという伝承がありますが、明治に至るまでは利用されることはありませんでした。発掘された石垣などの一部は整備されており、公園の中で見学することができます。

山上は明治以降の地形の改変が多いですが、一部では戦国時代の石垣などが残っています。一度だけ行われている調査でも火災で焼けた陶器や素焼の皿が出ており、生活の痕跡が伺われます。



平成 8 年度調査出土の石垣